

エネルギー消費と自由

Energy and Freedom

吉田 夏彦

Natuhiko YOSIDA

- 1928年7月生まれ
- 1951年北海道大学文学部哲学科卒業。北海道大学、東京工業大学教授を経て1988年から現職。哲学と論理学との関係、心の哲学、認識論などを研究テーマとする
- お茶の水女子大学文教育学部（〒112 東京都文京区大塚2-1-1）

「エネルギー」という概念は、必ずしも意味のはっきりしたものではない。その学問的な定義をめぐっても種々な議論が起こりうる。そこで「エネルギー消費」という言葉も簡単に使うべきではないという人もいる。しかし、ここでは、今の世の中でたとえば「エネルギー多消費型の文明」といった言葉を無造作に人々が使っている時に、暗黙の中に前提していると思われる、直観的な理解をもとにしてこの言葉を使うことにする。だから、たとえば石油という物質の消費のことも、文脈によっては平気でエネルギー消費の一例に数えることにする。

1. 自由の増大

東海道五十三次を歩いて行く昔ながらの旅にもそれなりの趣はあったが、時間がおそろしくかかる上に、体力に恵まれない人には難行苦行の連続でもあったろう。暇と体力と家業を休むだけの経済的余裕とに恵まれた人にして、一生にそう何度でもできるものではなかったと思われる。しかし、今は、新幹線や飛行機を利用すれば、昔の旅とは比べものにならないほどの短時間で、東京から京都にでかけて行くことができる。東京-京都間はおろか、日本全国どこにでも、また世界中のどこにでも、体力にあまり恵まれない人でも、自

由に、何度でも往復できる。それは、いうまでもなく、エネルギーを大量に消費する交通機関の利用が、だれにも可能な世の中になったからである。そうして、このような世の中が、エネルギー多消費型の物質文明によってもたらされたものであることもいうまでもない。

このような例を考えると、エネルギーの消費は自由に結びつきやすいものであるように思われる。医療の進歩は、病苦から多くの人を解放したし、食糧が、爆発的に増えている人口をどうやら支えることができるほど増産されるようになって飢餓からも人々は自由になった。こういった例もまた、エネルギー消費が、自由の増大を招いた例に数えることできるように思われる。

2. 失われた自由

しかし、これもいうまでもないことながら、「エネルギー消費」と「自由」とは同義語ではない。エネルギーを大量に消費する近代兵器を使って大規模な戦争が行われる時、人々の自由が増大するという保証はない。その戦争がたとえば恐怖政治から多数の人々を解放するためのやむをえないものだったとしたら、結果として自由を手にした人々の数はかなり多かったということになるかも知れないが、それでも、戦争中に殺された人々は生きる自由というもっとも基本的な自由を奪われたことになる。また生残った人の中にも、身体や精神の上でいやしがたい傷を負い、一生不自由な生活を余儀なくされる人が多数いることになることも大いにありうることである。

戦争、内乱のような物騒なことがない時代にし

でも、原子炉の暴走などで環境破壊が行われれば、多くの人の自由が失われることになる。原子力に限らず、エネルギー源の利用が環境破壊につながりやすい面のあることはよくいわれることである。現在の日本での環境破壊はそれほど深刻なものではないとする人も多いが、そういう人でも、エネルギー消費の少かった昔に比べると、たとえば空気が汚れていることは認めるであろう。現代の大都会の住民は「おいしい空気」を胸一杯吸う自由を失ってしまったのである。

通勤のため、電車を利用していることは電力消費という意味でエネルギー消費の一例であり、しかも必ずしも自由の喪失にはつながらない例であるが、だからといって逆に自由の享受の一例になるとも限らない。労働を楽しんでいる人、失業から解放されたことを喜んでいる人には通勤は自由と結びつくものかも知れないが、あまり感動を覚えずに義務的に働いている人にとっては、そうでもあるまい。

東海道五十三次を歩いての旅は、たとえば新幹線での旅に比べれば肉体的な負担は大きいものであるが、現代人の中にもやってみたいものだと考える人がいるであろう。しかし、その望を果たすことは昔に比べると、はるかに難しくなっている。自然歩道が整備されるまでは東京から京都まで歩いて行くということが土台不可能に近いことだったであろう。いい換えれば、エネルギー消費型の物質文明の発達は、のんびり歩いて時間をかけて旅をする自由を、多くの人々から奪っているともいえるのである。

3. 老 荘 思 想

つまり、エネルギー大量消費型の文明の到来によって始めて得られた自由、あるいは増加した自由がある一方では、失われた自由、あるいは、おびやかされている自由もあるのである。そこで、「問題はどちらの自由の方が大事かということだ」と考える人もいるであろう。特に物質文明をおう歌する人の中には、得られた自由と失われた自由とを比較すれば、差し引き得られた自由の方が多かったことになる主張する人が多いのである。

だが、その一方では、失われたものの方が多い

と考える人もいる。エネルギー大量消費型の文明の典型とされている、現在の科学技術文明の誕生のはるか以前から、物質的に環境を改善して行くかたちの文明一般に疑問を抱いていた人がいる。そういう人の思想の典型とされるのがいわゆる老荘思想である。老子や荘子が実在の人物であったのか、仮にそうであったとしても、その思想がどれだけ、残された文献から読み取れるか、といったことにはここでは立ち入らない。しかし、「老荘思想」という言葉が現代に生残っていること自体が、物質文明に批判を抱き、原始的な生活にあこがれる気持が現代の人々の心の底にひそんでいることを物語っているといえよう。

現代は、複数の価値観が共存している時代といわれるが、この共存は、必ずしも、グループとグループ、個人と個人の間の価値観の違いについてだけいわれるべきことではない。同じ一人の個人の心の中にも、必ずしも両立しやすいとは思われないさまざまな価値観がいくつも共存しているのが現代の特色であろう。飛行機、新幹線、高速道路を使って自由に各地を往来できる自由をおう歌する一方で、弥次喜多道中の昔を懐かしむ気持ちを持つのは、人情としては、わかりやすい状態である。

4. 心 の 自 由

今までに述べたことは、一つには、「自由」という言葉が本来多義的であるというこれもあたり前のことであるが、もう一つ、さまざまな価値観の間を自由に往来することが、重要な時があるということも言っておきたかったのである。近代以後特に重視された自由はこれであるといえる。

飢餓、病苦、貧困からの解放も自由の入手の重要なかたちの一つには違いない。そうして、経済繁栄の現代になるまでは、この自由は、必ずしも多数の人の手には渡らなかった。しかし、昔にも、恵まれた少数の人は、この自由なら手に入れていた。それでも、その少数の人達は、必ずしも、自由を満喫してはいなかった。心の不安定に悩まされたからである。宗教の開祖として有名な人物に、物質的には必ずしも貧しくはない家庭の出身の人がみられるのは、この間の事情を物語っ

ている。そうして今日もなお、心の安定を求めて、既成の、あるいは新興の宗教の教団に身を投ずる人がいる。宗教に救いを求めない人の中にも、組織の一員として、外見からはむしろ自由の少ない生活の中で懸命に働くことで心の自由を得ている人がいる。近頃、評判の悪い全体主義的な政治体制にしても、その下でこそ心の自由が得られると考えていた人がいたのである。

心の安定を求めるのは自然なことであるし、そのための工夫を各人がするのは、それこそ、各人の自由である。しかし、一人の人間に適した方法が他人に通ずるとは限らないし、またすべての人間が心の不安に悩んでいるわけでもない。さらに、心の不安を必ずしも避けず、煩惱の中に生きていて、それでよいとしている人もいる。それなのに、人間の悩みや解決方法はただ一通りしかないと考えて、それをすべての人に押し付けることは、他人の自由を奪うことになる。キリスト教の教会が、政治的な権力と結びついて、この間違いをおかしてきたことは、有名な話であるし、支配者が善意の人物である時にさえ全体主義政治の評判が悪いのもこのことと関係している。

5. 競争市場

そこで、先ほども言ったように、近代以後、さまざまな価値観の並立を許し、各人がその間を自由に往来することを認める考え方が有力になってきた。今ではこの自由が自由の典型のようにも思われている。価値観といっても必ずしも大げさなものを考えなくてもよい。趣味も、乗り回す自動車の好みも価値観の例になる。

さて、このような意味での自由を保証するものは何であろうか。共産主義者は、このような自由がふんだんに保証される日をもたらすことを目的として運動してきた。しかし、彼らの革命が成功した国においてかえって全体主義的な政治が、官僚の腐敗を伴って実現していたことは、今では周知の事実となっている。イデオロギーとしての共産主義が破産してしまったという結論を出すのは早すぎるかも知れない。政治的な権力を失った教団が、なおかなりの人数の心の安定を求める人々をひきつけているという事実もあるのだから、し

かし、宗教に関係するものを含めて、意識的に作られた政治組織は、近代的な意味での自由を保証するのはあまり得意ではないもののようにみえるとはいえよう。

競争市場と科学技術の開発との結合が、かなりの程度まで、近代的な自由の存在を保証する役目を果たしているということは、たとえば最近の日本での経験が示しているところである。日本の市場が文字どおりの自由市場ではなく、不注意な観察者には見えないかも知れない官僚の統制を受けているものであるとする指摘がある。この指摘には当たっているところがあると思われるが、それでも現在の日本の経済が「自由主義」をたてまえとしているという事実は残る。通商産業省の「指導」をはねかえして乗用車の生産に踏み切り、成功したといわれる企業の存在は、価値観の選択を統制しないという近代的な意味での自由につながる面を持っている。オイルショックの時には省エネルギーの上でも大きな努力をする日本の産業ではあるが、全体として競争市場の活力がたかまれば、エネルギーの消費量も大きくなる傾向があるとはいえる。そこで、近代的な自由と、エネルギー大量消費とが結びつくという考え方が成立しやすくなるのである。最初にあげた、交通機関の高速化の例にしても、個人の生活における選択の幅を広げる面が大きいからこそ、自由の拡大につながるものと考えられるのであろう。

6. 消費者の側

だが、激烈な競争にあけくれている企業人達は、何も近代的な自由の確保を目的として働いているわけではない。ねらっているのは、多くの場合、自分の企業が市場での覇者となることである。自社製品の市場でのシェアが拡大されることは、もちろん望ましいことである。その結果として消費者の選択の幅がせばまるということもしばしば起っている。たとえば自動車の場合、複数の企業が競争していて、消費者が自由に各社の製品を比べることができるという場合にしても、自動車を前提とした生活がきわめて不便なものになったということは、自動車製造・販売業者の努力の結果なのであり、その結果は、消費者の生活スタ

イルの選択の幅をせばめるという結果も含んでいるのである。

価値観の並立の幅を広げることを目指したイデオロギーがかえって全体主義的な体制をもたらした。この並立には無関心な競争市場が結果として全体主義をばねることになりやすいというのは、皮肉なことである。「たくむよりも自然にまかせておいた方がものごとにはうまく行く」とする老荘思想が、意外なところで、正しさを発揮しているといえないこともない。しかし、今もいったように、競争市場は、近代的な自由の敵になる場合もあるのである。

7. 現代の「禁欲」

昔の人々を悩ませた心の不安の中には、もちろん、形而上学的なものもあったろう。しかし、この世での生活がままならない、多少いい生活ができたにしても欲望の増大が制御できないところからくるきわめて現世的なものもあったであろう。このような不安をまぬがれるために多くの思想家、宗教家が開発してきた方法の一つは、欲望を根本から絶ってしまうというものであった。禁欲的な修行が多くの宗教の教団ですすめられているのもこのことと関係があろう。

完全な禁欲生活は強力な意志を必要とし、誰にもできることではない。しかし、多少の意志があれば、競争市場が作り出す傾向にさからってかなり自主的な生活を営むことはできる。たとえば、土地の値段がお話にならないほど高く、したがって住居の面積も著しく狭い大都会での生活を断念すれば、地方でかなり広い住居と庭とを手に入れ、自然に親しみ、しかもその気になれば衛星テレビやパソコンネットワークを通じて世界の情勢をいながらにして知ることでもできるという生活

が選択可能である。この「軽い禁欲生活」をかなりの数の賢者がすすめ、実践している。だが、こういう生活をしている人が必ずしも強調しないことの中に重大な点がある。それは、この種の疑似原始生活もまた、エネルギー大量消費型の文明のおかげで初めて可能になるものであるということである。大都会の真ん中にいる人間の生活に比べればエネルギー消費量は少いかも知れないが、いつ文明に復帰できるかわからない不安に悩まされたロビンソンクルーソーと違い、いわばエネルギー大量消費型の文明の周辺にいることにより、たとえば急病になった時に短時間で近代的な医療が受けられるという保証の下に暮しているのである。

8. これから

こういうわけで、近代的な意味での自由とエネルギー大量消費型の文明とは、完全ではないがかなりいい関係にあるものといってよいであろう。しかし、救いようのない環境破壊をもたらす危険もあるものだという警告も無視はできないものと思われる。仮に物質的には深刻な事態にならないにしても、精神面での荒廃を招くことも考えられないではない。危険をふせぐ絶対安全な道を計画的に選んだらと思う人がいるかも知れないが、計画という手段がこの方向では無力なものであることは歴史の示すところである。また、近代的な自由となじみやすいだけに、中世的な価値観が復活するようにでもなれば、このエネルギー大量消費型の文明の将来には影がさすかも知れない。この程度の不確実性がつきまとうのが未来というものだと心得てこの文明とつきあっていくのがよいかと思われる。

(原稿受付 1991年10月14日)